

一月十七日未明に起こった地震は、今でも私の脳裏に鮮明に焼き付いている。今までに感じたことのない揺れを感じ、無意識にタンスを手で押さえつけた。朝、いつもは見ることもないテレビをつける、ニュースというニュースはパニック状態で、ただならぬことが起こったことが窺えた。しかし、その時は、これだけの惨事になるうとは予想だにできなかった。

## 第二次救援隊に参加するまで

ニュースで、死者が二千人から三千人と報道されるなか、一月二十三日、広島大学として第一次救援隊が結成され、その資材搬送のため呉まで行った。第一次隊を「元気で頑張っ来ててください」と手を振って送り出した自分が、その四日後にまさか行くことになるとは……

一月二十六日、第二次隊として神戸へ行くことを告げられた。すでに神戸は壊滅的な打撃を受け廃虚と化していたこと、また、余震が頻繁に起こっていたことは、テレビの映像で生々しく伝えられており、その真っ直中に救援隊として行くことに、かなりの不安と疑問を感じずにはいらなかった。

一月二十七日、小心者の私は、昨夜から異様な興奮におそわれ、眠れないまま朝を迎えた。初のジャージ出勤をした。昼過ぎには、一部の教職員のかがたに励まされ出発することになるが、あたかも道化役のピエロは、「五十年前の青年たちはどんな気持ちだった

ろう」などと妙なことを考えていた。

資材を船へ搬入し広島商船高専棧橋を出航したのは、夕暮れ迫る頃であった。夕日に映える海面が、前途を余計に不安がらせた。しかし、このとき考えていたのは、①神戸の人々の話を聞いてあげること、②救援隊を派遣するという現状からの打開策を見つけること、③心の中にあつた思い出の神戸の街を改めてしっかりとこの目で見る、こと、という三つだった（というより、これぐらいしか考えられなかった）。

## 目に飛び込んできた神戸の街は

# 神戸の街で見たこと、感じたこと



一月二十八日、目が覚めるとすでに神戸の街が眼前に広がっており、遠くからではなんの変哲もない様子だった。しかし、船が棧橋に近づくにつれ、テレビの映像と同じ風景が至るところから目に飛び込んできて、しばし茫然と立ち尽くした。

すでに立入り禁止となっていた棧橋から、神戸商船大の野営地までは約三百メートルあり、そこには風にはためくテントが幾張りも張られ、第一次救援隊の苦闘の跡が窺えた。

けたたましいサイレンやヘリコプターの轟音のなかで、第一次隊との引き継ぎをしたが、誰もが不安の色を隠せなかった。

## 悪戦苦闘の四日間

翌日からの、毎日五百食分以上の食事の準備と配給には、かなりの労力を強いられたが、目を追うごとに隊員同士の団結力は高まった。ただ、被災された人々の痛みはひしひしと心に伝わり、自分の心の中で、「自分にはどうしようもない」という思いと、「何かできることがほかにあるのではないか」という思いがぶつかりあい、苛立ちのよ

うなものを感じずにはいらなかった。第一次隊を引き継いで三日目には、被災者が一人、二人と、食事配給時間

外にも野営地を訪れてくるようになってきた。ある婦人は、娘が亡くなったにもかかわらず、その場を一生懸命しのぐ姿を語り、また、ある青年は、「被災のため近郊の大阪方面に避難している神戸市民は、いつか必ず帰ってくる。それは、みんな神戸が好きだから」と誇らしげに話してくれた。

「どうしてこの人たちはこんなにすごいのだろう」、「自分が同じ境遇になつたら耐えられるだろうか」、「人間はずいぶん、そう思うばかりだった。

神戸商船大（東灘区）から神戸の中心地、三宮までは約十キロほどであったが、自分にも分からない何かを求めるように自転車を駆った。歩道は所々家

屋倒壊で塞がっていたため、距離的には倍近くあつたように感じた。予想をはるかに上まわる惨状のなか、老いも若きもまた何かを求めてさまよっているようにみえた。しかし、そこには、人間の生への執念のようなものを感じ、神戸の街が再びあの美しさを取り戻すのも、我々が思うより早く訪れるような気がした。

## 満足感と疲労感

四日間の救援活動は終わった。帰る時には、自分がいつたいたいそこに何日いたのか忘れたよう、また、後ろ髪を引かれるような思いだった。この四日間で、自分なりにこの行動の目標が達成できたかどうか、あるいは、正しかったのかどうかは未だに疑問に残るところだが、自分ができる全てのことはやり尽くしたという満足感と、その後に来る疲労感だけが残った。

私が神戸で見たもの感じたものは、人生のなかで決して忘れられるようなものではなく、それをどう生かすか、使命感を与えられたような気がする。この街で、全てを表現するには困難なほどさまざまな経験をしたが、一日も早い神戸の街の復興を祈るとともに、四日間という、今思うと短い間ではあつたが、神戸の人々のために、という思いで行動を共にした隊員の皆様に感謝したい。

経理部 川井寿裕

(かわい・としひろ)